

Title	エコシステムマネジメントにおけるエコツーリズムの役割と発展メカニズム
Author(s)	敷田, 麻実; 森重, 昌之
Citation	日本観光研究学会全国大会研究発表論文集, 16: 133-136
Issue Date	2001-12
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/16824
Rights	本著作物は日本観光研究学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Institute of Tourism Research. Copyright (C) 2001 日本観光研究学会. 敷田麻実, 森重昌之, 第16回日本観光研究学会全国大会研究発表論文集, 2001, pp.133-136.
Description	

エコシステムマネジメントにおけるエコツーリズムの役割と発展メカニズム

The Role of Ecotourism in Ecosystem Management and its Development Mechanism

敷田 麻実* 森重 昌之**

SHIKIDA Asami MORISHIGE Masayuki

エコシステムマネジメントは、人間活動も生態系の一部に含めた上で生態系の保全と利用を一括して管理しようとする概念である。本研究は、エコシステムマネジメントの管理対象が、生態系から最終的には創造プロセスに拡大することを示した。そして、エコツーリズムの管理がエコシステムマネジメントにつながることを予測し、そのメカニズムを分析した。さらに、エコツーリズムの管理を追求することによって、地域を開放しつつ自律的に地域を充実させる可能性があることを示唆した。

キーワード：エコツーリズム、エコシステムマネジメント、ナレッジマネジメント、管理

1. はじめに

エコツーリズムは1980年代後半から注目され始めた alternative tourism の一形態である¹⁾。エコツーリズムにはさまざまな定義があるが、「自然環境に与える負荷を最小限にしながらそれを体験し、観光の目的地である地元に対して何らかの利益や貢献のある観光」と考えることができる²⁾。それは、従来のマスツーリズムがはらんでいた観光地の自然環境や地域社会への悪影響を緩和する観光の形態として期待されている。しかし、その効果や緩和メカニズムは地域や条件の差が大きく、一般化されることはほとんどなかった。そのため「不透明な選択肢(ambiguous alternative)」と評価されることもある³⁾。このような状況の中でもエコツーリズムは確実に伸びているので、自然環境や地域社会への影響を無視できないとすれば、何らかの対策が必要であろう。しかしエコツーリズムに関する議論は、①自然保護の手段、②観光振興の手段、③広い意味での地域振興の手段など、「手段としてのエコツーリズム」を個別に捉えようとするものがほとんどである。

そこで本研究では、このような個別の効果に注目するのではなく、「エコツーリズムが観光地を含めた地域の自然環境や地域資源の管理を進めるしくみ」であるという視点からエコツーリズムを分析し、そのモデルを提案した。特に最近注目されている自然環境の管理方式である「エコシステムマネジメント(生態系管理)」との関連に注目し、新たな地域経営システムへの展開可能性を評価した。

2. エコシステムマネジメントとエコツーリズム

(1)エコシステムマネジメントにおけるエコツーリズムの「管理」

エコツーリズムは新しい観光の形態として期待されているが、「エコツーリズムはもともと自然環境の保全機能を持つので、従来問題のあったマスツーリズムと代替することによって、観光地の自然環境を持続的に利用できる」とする考え方には無理がある。なぜなら、①たとえ1つ1つの負荷は小さくても、それが集積すれば大きな影響を与える、②エコツーリズムが成功すればするほど参入者や来訪者が増加し、その規模が拡大する傾向にある、③観光客が通過者となりがちであるマスツーリズムとは異なり、エコツーリズムは観光地の手付かずの自然環境や地域社会に深く浸透し、悪影響の負荷がより深刻になるからである。そこで、エコツーリズムの実施にあたっては、注意深い管理が必要になる⁴⁾。

最近、「エコシステムマネジメント」と呼ばれる自然環境の管理が、米国の森林管理を中心に提唱されている⁵⁾⁶⁾。それは「地域の生態系の多様性や生産性の持続、回復を導く科学や技術を示す概念」であり、地域における「協働のしくみ」である⁷⁾。一方、柿澤はエコシステムマネジメントを「管理のためのしくみづくり」と説明している。前者は生態系のモデルや生態学に、後者はそのしくみづくりに重点があるという差はあるが、エコシステムマネジメントはより長い期間の管理を目指した自然環境の管理の新たな方式である。それは単なる古

* 金沢工業大学環境システム工学科

** パシフィックコンサルタンツ株式会社

テムマネジメントはより長い期間の管理を目指した自然環境の管理の新たな方策である。それは単なる古典的資源管理や科学的管理とは異なり、人間と自然環境とのつき合い方を根元的に見直すものであると言われている⁸⁾。

従来までの保全概念からより進んだ、生態系を持続的に維持するエコシステムマネジメントのようなしくみが注目されるのは、もはや生態系や自然環境を人間活動と切り離して管理することに限界が生じているからである。そこで、自然環境や生態系の持続可能な利用を進めるためには、環境保全と人間の利用を調整する「しくみ」を創出し、その手段で管理することが考えられた⁹⁾。

エコシステムマネジメントは、生態系も含めた自然環境や地域資源の持続可能な利用を進めるために、自然環境の保全とその利用のバランスをとる、つまり自律的に管理するという概念である。しかしそれは単なる管理ではなく、賢明な利用(wise use)であり、手を触れない保護ではなく「利用」を前提としている。そして、エコシステムマネジメントでは、生態系の要素の中に人間が含まれ¹⁰⁾、その人間の利用が管理対象となる¹¹⁾。

一方、エコツーリズムにおける管理の対象はその「活動」である。しかしエコツーリズムの影響を受けるのは観光地の自然環境や地域資源であり、それらを同時に管理することが求められる。そこで管理の対象は、観光の目的地である地域の自然環境や資源、それらの関係者(広い意味での利用者)の活動全体となる。

このように、エコシステムマネジメントとエコツーリズムの管理は、第1に管理の目的が一致する、第2に管理する対象が共通する。第3にアウトプットとして地域の経済や社会の充実を重要視する点で、エコツーリズムの管理とよく一致する。しかしエコシステムマネジメントは地域固有の伝統的な利用だけではなく、レクリエーションや観光の利用までを対象にした管理であり、エコシステムマネジメントの概念はエコツーリズムの管理を包含する可能性が高い。

以上のように、地域全体のエコシステムマネジメントの中でエコツーリズムとその管理を捉えるモデルは、従来のエコツーリズムの分析には見られなかった視点である。

(2)エコシステムマネジメントの管理対象の拡大と創造プロセス

エコシステムマネジメントは、従来の自然環境や生態系だけを対象としていた自然科学的管理か

ら、人間の活動を含めた管理へと拡大したが、このような対象の拡大は次の段階にステップアップする可能性を持っている。それは人間と生態系、個人と社会の関係性といった「創造プロセス」への管理対象の拡大の可能性である(図-1)。この「創造プロセス」の管理とは、単に維持することではなく、連続的に創造する、いわば創造活動のマネジメントを指す。

この創造は、実際には生態系の「秩序ある利用のしくみや方法」、そして複数の利用を秩序立てる「社会的調整機構」で表される。つまり制度やしくみなどの人間社会の「社会的インフラ」と、優れた生態系のすばらしさや秩序あるその利用を認識し、評価・満足する「文化」である。

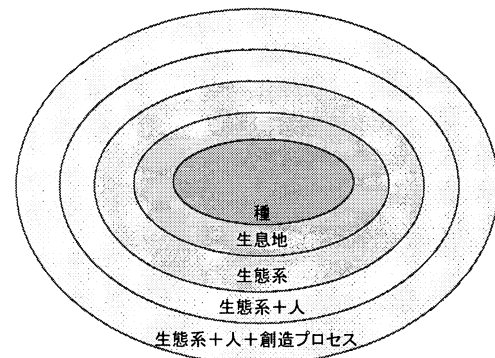


図-1 管理対象の拡大過程

このように、管理の対象が拡大することがエコシステムマネジメントの充実である。それは図-1に示すように、種の保全から生息地、生態系、そして人(利用)、最終的には生態系と利用、そしてその創造プロセスといった管理対象の拡大として表すことができる。このように所与の資源(ここでは環境や生態系と考える)をもとに、その利用やプロセスも含めて総合的にマネジメントしていく点では、管理よりも「経営」や「やりくり」という表現が適当であるかもしれない。

そしてその拡大には、生態系とのコミュニケーション、またそれを同時に利用する他の利用者とのコミュニケーションが必要となり、生態系やその利用に関しての連続的な「学習」がそれらを生み出す。この学習は、意図的に創出する努力や工夫があつて初めて成り立つ。つまり、文化や社会のしくみを創出する「創造システム」が必要になる。なぜなら、文化やしくみはいずれも人間が創造した「知恵」であり、それが歴史的に集積されたものの総体が、1つのシステムとしてその管理を実現していると考えられる。

ただし、そのシステムは時間の経過とともに変

化するので、当然生態系の利用への対応を余儀なくされる。そこで管理のしくみを維持するためには、それを固守するのではなく、状況に応じて新たなしくみを創出していくような柔軟な対応または変化に対応した「連続したしくみの創造活動」が必要になる。

このような連続的な知恵の創造プロセスは、最近「ナレッジマネジメント」¹²⁾として注目されている。エコシステムマネジメントは、管理対象の拡大によって知恵を連続的に創造する「知識創造活動」となると考えられる。

(3)エコツーリズムの管理とその方法

エコシステムマネジメントでは、その管理対象が拡大し、最終的には創造プロセスまで管理する状態になる。しかし管理対象の拡大に伴って連続的に管理のしくみも変化しなければ、持続可能な管理は実現できない。また管理対象の変化と同時に、管理対象とする生態系の利用も変化するはずである。例えば、伐採や採集、採掘などの資源としての生態系の直接的利用から、認識する価値の拡大によって、エコツーリズムのような自然環境の非消費的利用が増加するだろう。このように価値の拡大が管理対象や利用者に影響を与えることは、米国の森林管理の例で指摘されている¹³⁾。

そして利用者の範囲が拡大した場合には、管理の基準やそのためのルールを明確に公開する必要がある。閉ざされた「クラブ的共同体」で自然環境や地域資源の管理を進める場合には、その共同体内部だけに通用する暗黙知のようなルールや基準でも通用するだろう。しかし、地域外から来訪者を迎え、さらに観光地の自然環境や地域資源に深く浸透する活動であるエコツーリズムではその可能性は低い。誰にでも理解可能なユニバーサルなルール、形式知化してこそ管理は成立する。

逆にこのような汎用ルールを無視し、地域独自の管理を徹底するケースも考えられる。しかしその場合には、地域の共同体ルールを地域外から来訪するエコツーリストに厳格に要求することになり、違反や離反が起これると思われる。それでも無理に進めようとするれば、結果的に管理の不徹底につながり、観光地の自然環境と地域社会に悪影響を与える。つまり、エコシステムマネジメントではエコツーリストなどの地域外からの来訪者を取り込んだオープンな管理システムを保ちながら、自律的な管理を維持することが求められる。

そこでこのような場合に有効なのは、管理者と被管理者に分離した観光客と地域の関係の再構築

である。エコツーリストを被管理者、管理を進めるのは観光地の関係者や住民となれば、やはり閉じた共同体とそれに管理される来訪者となり、役割が固定されてしまう。

従来のマスツーリズムでは、来訪する観光客は自然環境や地域資源の単なる利用者であった。しかしエコツーリズムの場合には、観光客が地域の自然環境や地域社会と深く関わることで、地域住民とともに学習しながら自然環境や地域資源に対する享受能力を向上できるので、「デザイナー」や「共同管理者」にもなることができる。

敷田・森重はエコツーリズムと従来のマスツーリズムの違いを、地域で「完成品」をつくるか、「部品」を外部に提供するかとの差であるとしている¹⁴⁾。マスツーリズムでは、地域の自然環境や資源は単に「部品」として観光業者に提供されるだけであるが、エコツーリズムでは地域が自律的に観光をデザインし、観光に必要な自然環境や資源を管理しながら、エコツアーという「完成品」を組み立てる。その際にエコツアーのデザインがエコツーリストの参加によって行われても不思議ではない。

これは、Mclain & Lee¹⁵⁾やChristensen¹⁶⁾が示す、管理対象や状況の変化に反応して管理内容を変化させるというadaptive management(順応的管理)である。そして必要に応じて管理内容を変化させるという点では、管理の自律性が強く求められる。その手法としては、利用者の満足度を管理するBBM(benefit based management)¹⁷⁾や利用者と生態系、管理のそれぞれの条件の最適な組み合わせを工夫するROS(recreation opportunity spectrum)などが有効であると思われる。

またエコツーリズムが地域の自然環境の管理、エコシステムマネジメントの形成のきっかけになるなど、エコツーリズムの管理が単に完成するだけでなく、それに伴って地域の自然環境の管理や地域経済に関する組織やしくみも変化するので、ある意味で、エコツーリズムは観光におけるイノベーションであると考えられる。

3. エコツーリズムの管理からエコシステムマネジメントへの展開

エコツーリズムの管理はエコシステムマネジメントに融合すると述べたが、エコシステムマネジメントが一定規模の生態系で構成される「地域」を主体としているのに対して、エコツーリズムでは地域外からの来訪者の存在を念頭に置いている点

には差がある。しかし地域外からの来訪者の存在は決してマイナスではなく、地域を閉鎖して管理できない現実を考えれば、地域を開放しながら、自律性を失わずに地域の充実を図るモデルとなる可能性を指摘できる。その点で、エコツーリズムの管理を試みることは、特にエコシステムマネジメントに直結しやすいのではないか。

そして当初エコツーリズムの管理と考えられていた管理が、自然資源や地域環境の管理をより有効に進めるために発展し、他の利用の管理と融合することで、総合的なエコシステムマネジメントに至ることが仮説として提案できる。

つまりエコツーリズムの管理を追求しているうちに、地域の生態系や資源の総合的な管理であるエコシステムマネジメントに到達できる可能性である。さらにこのような管理のしくみを追求することで、地域の文化や制度などを創造するプロセスの創出につながり、最終的には知識創造であるナレッジマネジメントにまで至ることが予想できる。この過程はすでに敷田・森重ほか¹⁸⁾が「エコツーリズムの目標効果」による地域の構造変化として、分析しており、今後さらにそのメカニズムを探る必要がある。

このようにエコツーリズムは、その管理を目指すことで地域の創造システムをつくり出し、地域を開放しながら自律性を失わずに地域が充実する新たな地域経営システムとなる可能性が高い。またこの点で、地域経営に難問を抱える各地の自治体においてエコツーリズム導入を進める際の説得力を持つであろう。

【参考文献】

- 1)Wearing, S. & Neil, J.(2000): Ecotourism- Impacts, Potentials and Possibilities, Butterworth Heinemann, p.163
- 2)敷田麻実・森重昌之(2001)：観光の一形態としてのエコツーリズムとその特性、(石森秀三・真板昭夫編「エコツーリズムの総合的研究(国立民族学博物館調査報告、23)」、国立民族学博物館)、pp.83-100
- 3)Clarke, W.C.(1987): Introduction,Ambiguous Alternatives: Tourism in Small Developing Countries, Britton, S. and Clarke, W. C. eds., The University of South Pacific, p.194
- 4)Jacobson, S. K. & Robles, R.(1992): Ecotourism, sustainable development, and conservation education: Development of a tour guide training program in Tortuguero, Environmental Management, 6(16), p.701-713
- 5)柿澤宏昭(2000)：エコシステムマネジメント、築地書館、p.206
- 6)島山武道(1996)：法律は生物多様性を守れるか、(環境経済・政策学会編「環境経済・政策研究のフロンティア」東洋経済新報社)、p.118-124
- 7)鷺谷いつみ(2001)：生態系を蘇らせる、日本放送出版協会、p.227
- 8)Grumbine, R. E. (1994): What is ecosystem management?, Conservation Biology, 8(1), p.27-38
- 9)敷田麻実(2000)：利用特性モデルに基づく沿岸域管理の二重構造の必要性に関する研究：沿岸域の利用特性から見た管理システムの構造、日本沿岸域学会論文集、12、p.27-38
- 10)Kessler, W. B. and Salwasser, H.(1995): Natural Resource Agencies: Transforming from Within, A new century for natural resources management, Knight, R. L. & Bates, S. F. eds., Island Press, p.171-187
- 11)Jennifer, A. et al.(1999): Ecosystem Management, Taylor and Francis, p.193
- 12)野中郁次郎・梅本勝博(2001)：知識管理から知識経営へ：ナレッジ・マネジメントの最新動向、人工知能学会誌、16(1)、p.4-14
- 13) 10)と同じ
- 14)敷田麻実・森重昌之(2001)：エコツーリズムによる地域の持続的発展の可能性：石川県白山麓のケーススタディから見た「環境に優しい観光」の未来、環境経済・政策学会年報、6、p.200-215
- 15)Mclain, R. J. & Lee, R. G.(1996): Adaptive management: promises and pitfalls, Environmental Management, 20(4), p.437-448
- 16)Christensen, N. L. et al.(1996): The report of the ecological society of America committee on the scientific basis for ecosystem management, Ecological Applications, 6(3), p.655-691
- 17)Lee, M. E. & Driver, B. L.(1999): Benefits-based management: A new paradigm for managing amenity resources, Ecosystem Management, Jennifer, A. et al. eds., Taylor and Francis, p.143-154
- 18)敷田麻実・森重昌之・新広昭・佐々木雅幸(2001)：エコツーリズムの発展過程と構造モデル、(石森秀三・真板昭夫編「エコツーリズムの総合的研究(国立民族学博物館調査報告、23)」、国立民族学博物館)、p.111-128